私のお薦め

夏目漱石「夢十夜」

平成16年11月より、野口英世を肖像とした千円札が出回り始めている。今後、夏目漱石の千円札が消えていくことを思うと、私には少し悲しい出来事である。

皆さんは、夏目漱石の「夢十夜」（ゆめじゅうや）という作品をご存知だろうか。「こんな夢を見た。」という書き出しで始まる作品であることは知っていても、実際に読んだ人は少ないかもしれない。この作品は、夏目漱石の夢を題材として十の話を集めたものである。夢という自由な世界の中で、主人公は侍であったり子供であったり、舞台は明治時代であったり神代の昔であったりと、様々である。暗い雰囲気の作品ではあるが、文章自体に人を惹きつける力があり、また、短く読みきりやすい割には深みもある作品である。以下、あらすじは隠さずに、いくつかの「夢」を紹介したい。

第一夜　死の床に就く女性と、主人公の約束・再会を描いた話である。人物や風景の描写から、時間の流れや空間の構図まで、すべてが美しく、丹念に描かれている。死の瞬間でさえ美しく、しかも悲しさが感じられない。そして、ただ再会を信じて待つ主人公が印象的である。夢十夜の中で唯一、ほのかな希望の見える話である。

第三夜　盲目の子供を背負いながら暗闇の中を歩く主人公が、次第にある事実に気付かされていく話である。不気味な風景と子供との会話が、主人公の視点で絶妙に描かれている。漱石の原罪意識が潜んだ話らしい。盲目は何かを象徴しているのだろう。

第六夜　なぜか明治時代を舞台に、仁王を刻んでいる運慶の姿を見物する話である。観客の会話も交えつつ、運慶の姿を客観的に描いており、読者もその観客になったような感覚がおもしろい。その後、主人公自身が彫刻に挑戦してみる部分も容易に感情移入できる。しかし実際には、日本文化の衰退を投影した重い話のようである。

第七夜　どこへ向かうかわからない大きな船に乗っている主人公が、その漠然とした不安に負けて海に飛び込んでしまう話である。船は日が沈む方向、西に向かっている。西欧を見た漱石が、日本の行く末、あるいは漱石自身の行く末に対する不安を暗に描いた話である。現代人の私も、漠然とした不安に共感を得る。

他の話もすべて独特の雰囲気で、中には意図の汲み取りづらい話もある。しかし、何かを断片的かつ象徴的に表現した特異な作品であるからこそ、この作品には夏目漱石の陰の本質が潜んでいるようにも思える。そして、この陰が私を惹きつけている。

私が夢十夜を知ったのは、ある高校の国語の入試問題に第六夜が使われていたからである。中学時代はこの作品の深みにまでは気付かなかったが、独自の世界観と文章の表現力だけでも十分に惹きつけられた覚えがある。夏目漱石が文豪として崇められた理由を、「夢十夜」を通して皆さんに再認識しいただければ幸いである。

成川淳（なるかわあつし）